

E709.2  
49  
E709.2-Ko49ウ  
1200502010271

巻末:解説あり

正倉院御物畵録  
六



始









421-21

E  
709.2  
K049



正倉院御物圖錄 第六輯

中倉納物

目次

|      |      |      |      |          |         |       |       |        |           |      |      |      |           |
|------|------|------|------|----------|---------|-------|-------|--------|-----------|------|------|------|-----------|
| 第十四圖 | 第十三圖 | 第十二圖 | 第十一圖 | 第十圖      | 第九圖     | 第八圖   | 第七圖   | 第六圖    | 第五圖       | 第四圖  | 第三圖  | 第二圖  | 第一圖       |
| 同    | 同    | 同    | 同    | 繪紙二卷之內其一 | 版畫寶相華文圖 | 墨畫人物圖 | 墨畫鏡背圖 | 梵網經標紙繪 | 麻布山水圖二張之二 | 同    | 同    | 同    | 麻布山水圖二張之一 |
| 其五   | 其四   | 其三   | 其二   |          |         |       |       |        |           | (一部) | (一部) | (一部) |           |





第十五圖

吹繪紙其一

第十六圖

同 其二

第十七圖

綠金箋

第十八圖

斑犀把漆鞘黃金葛形珠玉莊刀子

斑犀把漆鞘銀漆莊刀子

第十九圖

青石把漆鞘金銀莊刀子

烏犀把漆鞘樺經黃金莊刀子

第二十圖

水角把沈香鞘金銀山水繪金銀珠玉莊刀子

沈香把鞘金銀花鳥繪金銀珠玉莊刀子

第二十一圖

沈香把鞘金銀珠玉莊刀子一雙

斑犀把白牙鞘刀子

沈香把假斑竹鞘樺經金銀莊刀子

第二十二圖

紫檀螺鈿把斑犀鞘金銀莊刀子一雙

斑犀把沈香銀繪鞘金銀莊刀子一雙

第二十三圖

沈香把鞘金銀莊刀子一雙

斑犀把樹皮塗鞘白銀莊刀子一雙

第二十四圖

棗把鞘四合刀子

紅梅把鞘刀子

白牙把鞘刀子一雙

第二十五圖

黑柿把鉈

沈香把瑤瑁鞘金銀莊刀子

白牙鞘刀子

牟久木鞘刀子

白犀鞘刀子

第二十六圖

斑犀把紅牙撥鏤鞘刀子

斑犀把彩繪鞘金銀莊刀子

樺經把鞘白銀玉蟲莊刀子

犀角把白銀葛形鞘珠玉莊刀子一雙

第二十七圖

斑犀把綠牙撥鏤鞘金銀莊刀子

黃牙彩繪把紫牙撥鏤鞘金銀莊刀子

第二十八圖

水角把漆鞘三合刀子

斑犀把水角鞘金銅莊刀子

黑柿把鞘金銀莊刀子

黑琉璃把白銅鞘金銀珠玉莊刀子

第二十九圖

白犀把鞘金銀莊刀子一雙

斑犀把金銀鞘刀子一雙

琥珀把金銀鞘刀子一雙

第三十圖

烏犀把刀子

斑犀把鞘刀子

烏犀把白牙鞘金銀莊刀子

牟久木把鞘金銅莊刀子

白牙撥鏤把鞘金銅莊刀子



第三十一圖

白牙撥鑊刀子

斑犀把紅牙撥鑊刀子

烏犀把白犀鞘刀子

白犀把鞘刀子

白犀把水角鞘刀子

斑犀把水角鞘刀子

白犀把刀子一雙

白犀把鳥犀鞘刀子

白牙把水角鞘小三合刀子

黃楊木把鞘刀子一雙

雜色緞綬帶

水精長合子殘闕

紅牙撥鑊尺四枚之一

同

同

同

同

同

未造了牙尺二枚

斑犀尺

木犀尺

梅羅竹管牙頭黃金莊筆

沈香斑竹樺經管斑竹帽白銀莊筆

第三十八圖

第三十七圖

第三十六圖

第三十五圖

第三十四圖

第三十三圖

第三十二圖

第三十九圖

第四十圖

第四十一圖

第四十二圖

第四十三圖

第四十四圖

第四十五圖

第四十六圖

第四十七圖

第四十八圖

斑竹管牙頭白銀莊筆

斑竹管帽牙頭筆

斑竹管紫檀頭筆

斑竹管帽牙頭白銀莊筆

豹文竹管篠竹樺經帽牙頭筆

斑竹管帽筆

斑竹管篠竹樺經帽筆

斑竹管煤竹帽筆

斑竹管篠竹帽筆三枝之一、二

假斑竹管帽筆三枝之一

篠竹管帽筆

斑竹管篠竹帽筆三枝之三

假斑竹管帽筆三枝之二、三

墨十四挺之內其一

同

同

同

白

假斑竹箱

赤漆葛箱

天平寶物筆



|       |           |
|-------|-----------|
| 第四十九圖 | 天平寶物墨     |
| 第五十圖  | 未造了沈香木畫筆管 |
| 第五十一圖 | 青斑石裝陶硯    |
| 第五十二圖 | 同         |
| 第五十三圖 | 青斑石鼈合子    |
| 第五十四圖 | 同         |
| 第五十五圖 | 沈香末塗經筒    |
| 第五十六圖 | 同         |
| 第五十七圖 | 檜金銀繪經筒    |
| 第五十八圖 | 織成最勝王經帙   |
| 第五十九圖 | 長斑錦緣竹帙    |
| 第六十圖  | 竹帙四枚之一    |
| 第六十一圖 | 同         |

庫中に珍らしい麻布墨畫である。南倉納物の菩薩圖と放んで、實損汚染し、補綴を加へてある。麻布墨畫二張の一つで、處々破

これはいつ納められたとも記録を伴はないが、古調歴然たるもので、筆墨をつくした御物の多い中に、獨り枯淡の味を占めてゐる。

長一米七八 幅五九釐

（繪軸三分一）

第一圖 麻布山水圖二張之一





THE UNIVERSITY OF CHICAGO  
LIBRARY  
1100 EAST 58TH STREET  
CHICAGO, ILLINOIS 60637  
TEL: 773-936-3000  
WWW.CHICAGO.EDU



第二圖 麻布山水圖二張之一（一部）

（原寸）

前圖の右邊一部を原寸に寫したものである。樹  
陰花影、奔湍細波、牧馬飛禽の境に、閑人獨り  
巖頭に立つて釣を垂れてゐる。

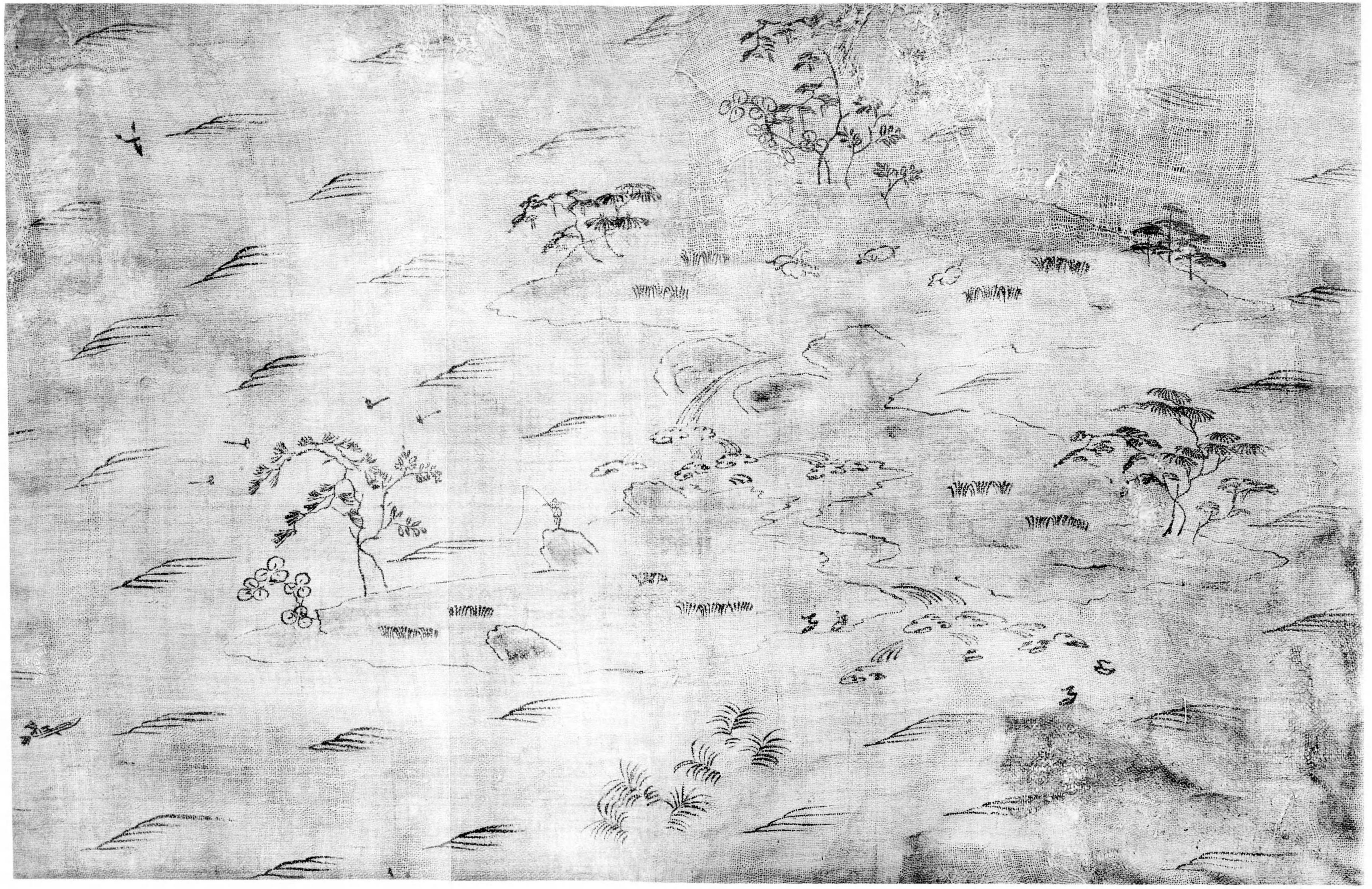




第二回 海山本圖(其二) 一(一) 浦

海山本圖(其二) 一(一) 浦  
浦、海、山、本、圖、(二)、一、一、浦  
浦、海、山、本、圖、(二)、一、一、浦  
浦、海、山、本、圖、(二)、一、一、浦







第三圖 麻布山水圖二張之一(一部)

原 寸

第一圖の中部の原寸圖。綠樹影  
を涵し、水波萬頃の天地に、朝  
を曳く人、磯と沖とに相呼應し  
て、閑寂を破つてゐる。





一、山水画的构图  
二、山水画的用墨  
三、山水画的用笔  
四、山水画的设色

第二章 山水画的欣赏



第四圖 麻布山水圖二張之一（一部）

（原 寸）

第一圖の左邊の一部。牆門閉ぢず。人來らず、  
空と水とを一雙の飛鳥に委ねてある。











第五圖 麻布山水圖二張之一

（全幅三分二）

長一米七六 幅五八釐

この一張は破損多く、當中中部  
上邊の一角はその大部分を失ひ、  
たゞ殘樹を殘してゐるのみであ  
る。右邊の一部と左邊の一部と  
は、原寸を以て表紙見返しに圖

してある。





1. 子...  
2. 用...  
3. 在...  
4. 其...  
5. 一...

註一五六 附八

(圖一)

第五圖 關於山水圖二卷之二



第六圖 梵網經標紙繪

(原寸)

梵網經は白麻紙二十四張水精軸の一卷で、楡金銀繪經筒(第五十五圖)に納めてある。こゝに圖するはその標紙で、紫紙に金銀泥を以て岩樹草遠山鳥蝶を描いてある。上下破れ失せてゐるが、なほ大部分を有し、中倉納物黒柿藍芳染金銀山水繪箱と同じ筆致の繪である。



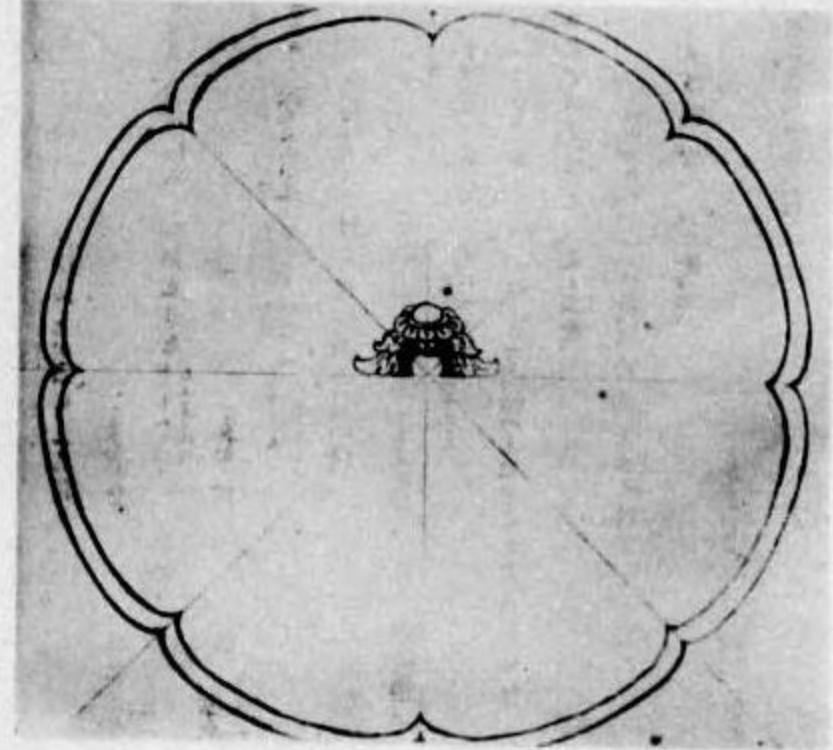


第六圖 茨城縣野海

（一）

本館より同じ部を撮影する。  
 3月6日午後5時、中津川野海に遊覧船を出し、  
 山崎野海に遊覧する。上下両岸に遊覧する。此  
 岸は石の壁で、常盤川を遊覧する。野海  
 遊覧船（福正十五回）に遊覧する。5月2日  
 茨城野海白海野二十四回茨城野海の一帯を、野海





第七圖 墨 畫 鏡 背 圖

(繪畫四分三)

圓徑二九釐七

圓鏡背面の文様の下繪で、朱雀玄武青龍を廻旋式に配し、中央に鈕の側面を描いてある。紙の中央から四つに折つた痕があり、折目に沿うて十字形に細線を劃してある。圖に薄く左文の字の見えるのは紙背に書いた文字で、繪の方は紙の表、文字の方は裏になつてゐる。

上圖は徑二九釐八の八角鏡背の下繪で、本圖とともに續修正倉院古文書別集第四十八卷に收めてある。外に天平寶字六年の文書に「應鑄御鏡四面」云々、又「東大寺所鑄御鏡」云々とあるのを對校すれば、當時鏡製作のことが窺はれる。







第八圖 墨 畫 人 物 圖

(原 寸)

黄麻紙に十三行の界線（長一九糎五、行間一糎八）を劃したるは、まさしく寫經の料紙であるが、一隅に墨戲の人物圖が畫かれてある。（續修正倉院古文書別集第四十八卷）







第九圖 版畫寶相華文圖

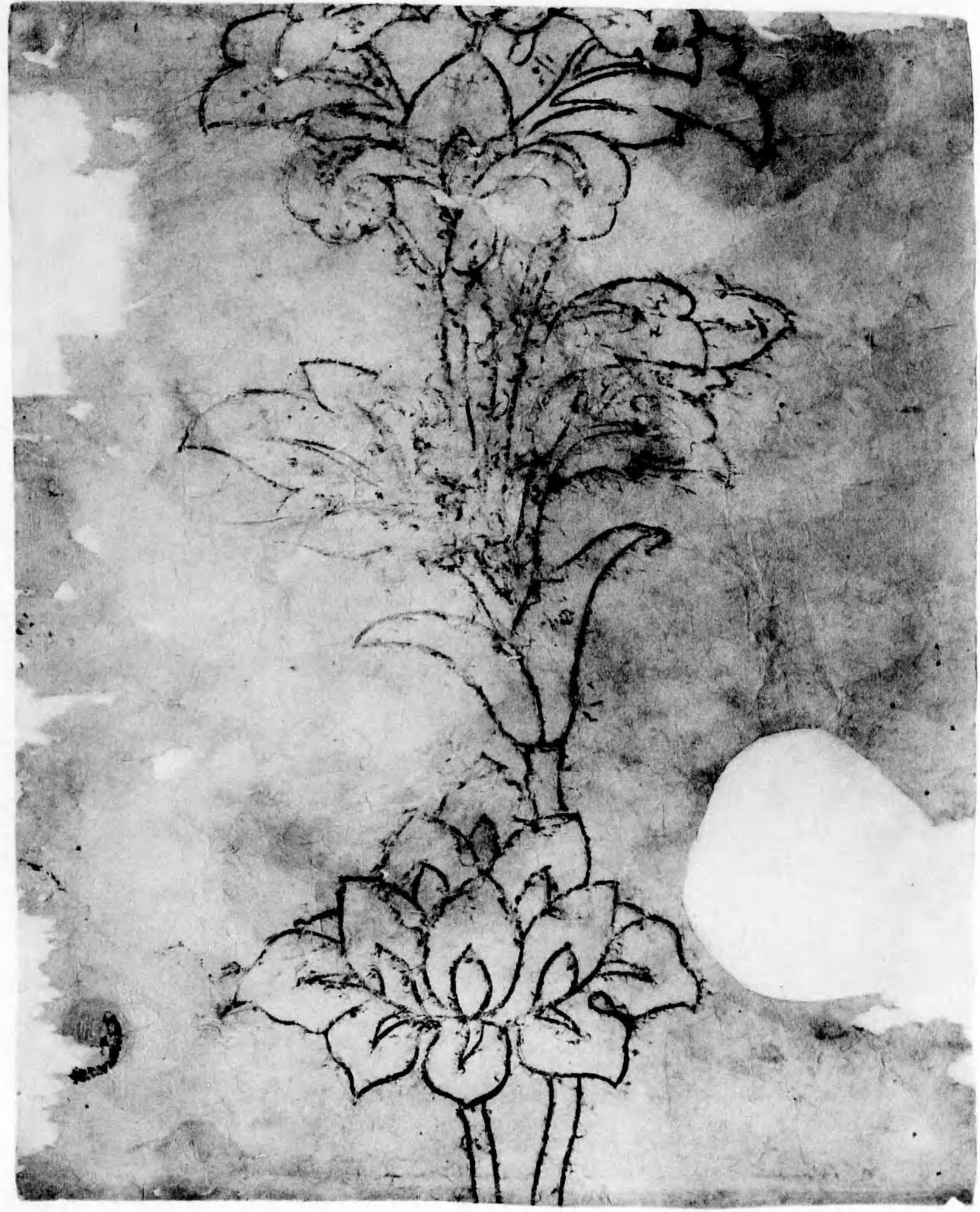
(縮寫四分ノ一)

縦三七浬 横二九浬七

白紙に薄墨色を以て刷つたもので、寶庫中版畫の唯一の例である。『六』『白六』『子』の文字の、花瓣にあるは朱書、葉面にあるは墨書である。

(續々集正倉院古文書第四十六帙第四卷)





草木圖 蓮花寶時華文圖

(續前頁)

(附々集五食調古文書卷四十六海嶺四奇)  
 續二のちお米書、葉面ニまゝに照らする。  
 の第一の爲すゝ。【六】【五】【子】のそぞ、  
 白珠、碧翠、白、黒、赤、青、黄、白、  
 葉三子、葉二子、葉一子



第十圖 繪紙二卷之内其一

(繪紙分之二)

縱五五種 横一米

繪紙二卷、一卷は四十張、一卷は三十七張を重ねて、各彩繪木軸に巻いてある。大形白麻紙の兩面に繪を描いたもので、用途も名稱も詳でない。慶長の目錄には「二卷と申し」元祿の目錄には「繪唐紙二卷」と記してある。本圖はその一張の一面で、黄楮色の顔料を用ひ、飛白の筆致を以て淡雲を描いてある。







第十一圖 繪紙二卷之内其二  
(紙四分)  
前圖と同じ繪紙であるが、浮雲  
の間に奔獸翔禽を插いてある。





○ 圖二 表 野 原 草 花 之 圖 式  
○ 圖三 表 野 原 草 花 之 圖 式  
( 註 明 各 部 )

第十一圖 繪圖二卷之四共二

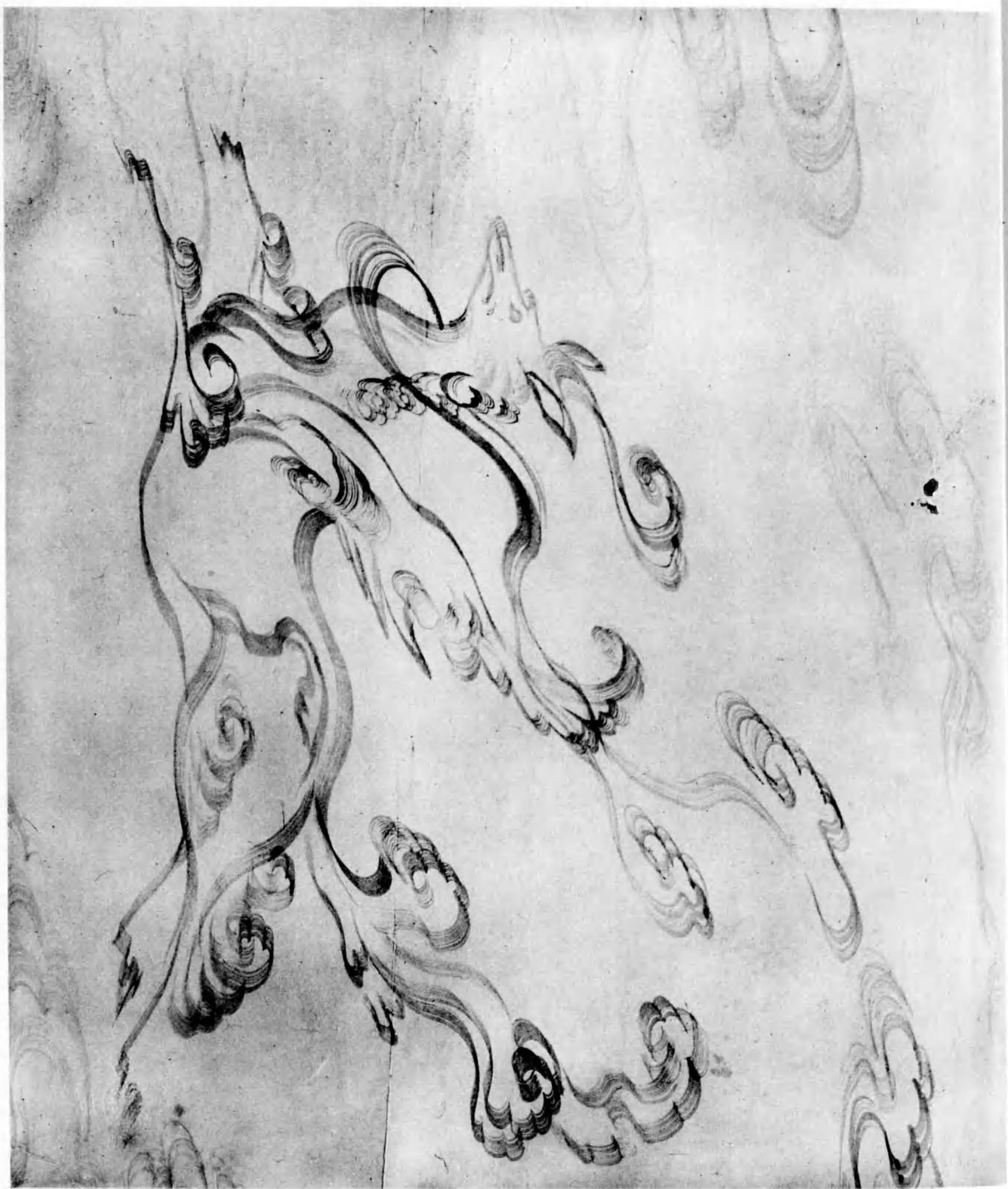


第十二圖 繪紙卷之内其三(一部)

圖 三

繪紙のうち一枚の一部を擴大に  
示したものの、この繪は、前圖の  
中に見える鑿とよく似てゐる  
が、しかも同じではない。





此乃本宮所繪之龍也。  
昔年某日，忽見此龍，其形如  
飛龍，其勢如奔馬，其聲如  
雷，其色如雲，其行如風。

卷之三

卷之三 繪畫二卷之內共三十一節



前の三圖は紙の表らしく、本圖  
と次圖とはその裏に當る。表の  
繪は既記の如く黄褐色であるが、  
裏は胡粉を以て専ら雲形を描い  
てある。

(繪四分)

第十三圖 繪紙二卷之内其四





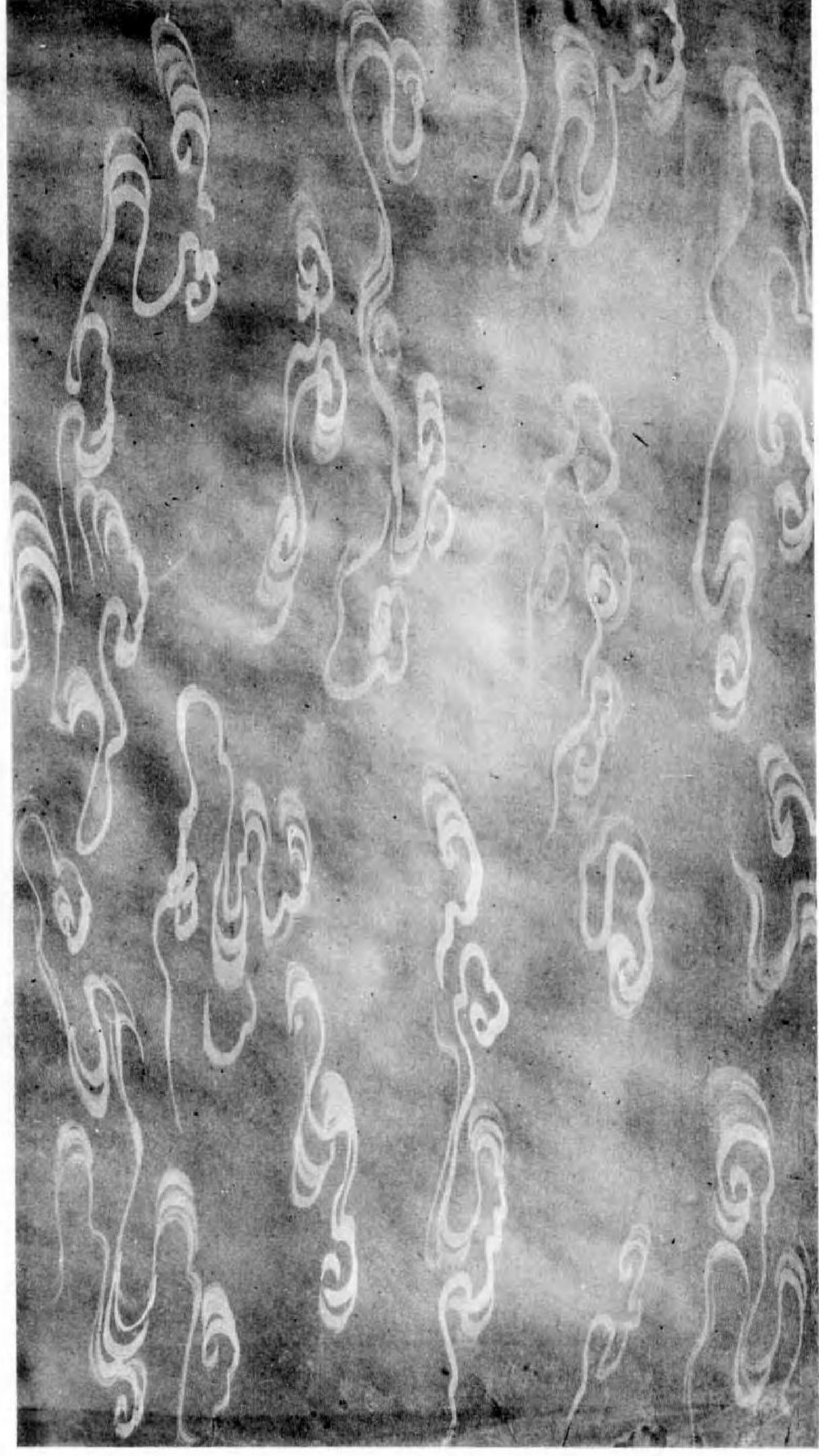


前圖と同じく雲形であるが、更に變化を見せてゐる。この五圖を通じて觀られる通り、繪紙の繪は流暢輕快を以て勝れてゐる。

繪圖分之二

第十四圖 繪紙二卷之内其五





諸君の御覧の如く、此の巻は、  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、  
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、

（一）

第十四圖 卷之二の終り



第十五圖 吹箱紙其一

（繪三分二）

縦二九釐五 横四釐

裏面の白紙で、表の一面に滑澤を出し、茶又は藍の繪具を吹き蒔いたもの。三十張のうち茶色二十五張、藍色五張、又その十三張は無文で、他は文様を白く抜いてある。文様を出すに型を用ひたものらしく、十七張五種に別れ、榊木山岳、草花、蝶鳥等を按配してある。本圖はそのうち藍色の一張である。







吹繪紙三十張のうち茶色の一張  
である。

（縮三分二）

第十六圖 吹繪紙其二





中華書局出版



表裏とも緑色無文で、一方の面にはまばらに金粉を蒔いてある。蓮瓣の形に鑑られてゐるのは、蓋し佛華の散華なごに用いられたものであらう。この種の紙は今僅に本圖の三片を存するのみであるが、當時の文書に屢見する所の『金塵線紙』といふのは多分これのことであらう、それならば頗る多量に需用せられたもので、本圖の例の外に、種々の場合に用途の極めて廣かつたものと見

4  
る。

第十七圖 綠 金 箋  
長二五釐三 幅一五釐五  
(縮寫分ノ三)







北倉納物の刀子五口は既に第一輯第二十一圖乃至第二十四圖に掲げたが、これから以下十五圖には中倉納物の刀子六十二口を載せる。そのうち二十六口は二口づゝ對になつてゐるから、つまり十三雙と三十六隻となる。  
毎圖解説に照して右から見るやうに配置してある。一隻の表裏を並べた圖と、一雙を並べたものとは一瞥判然であるから解説には一々これを指摘しない。

第十八圖 刀子 二口

(原 寸)

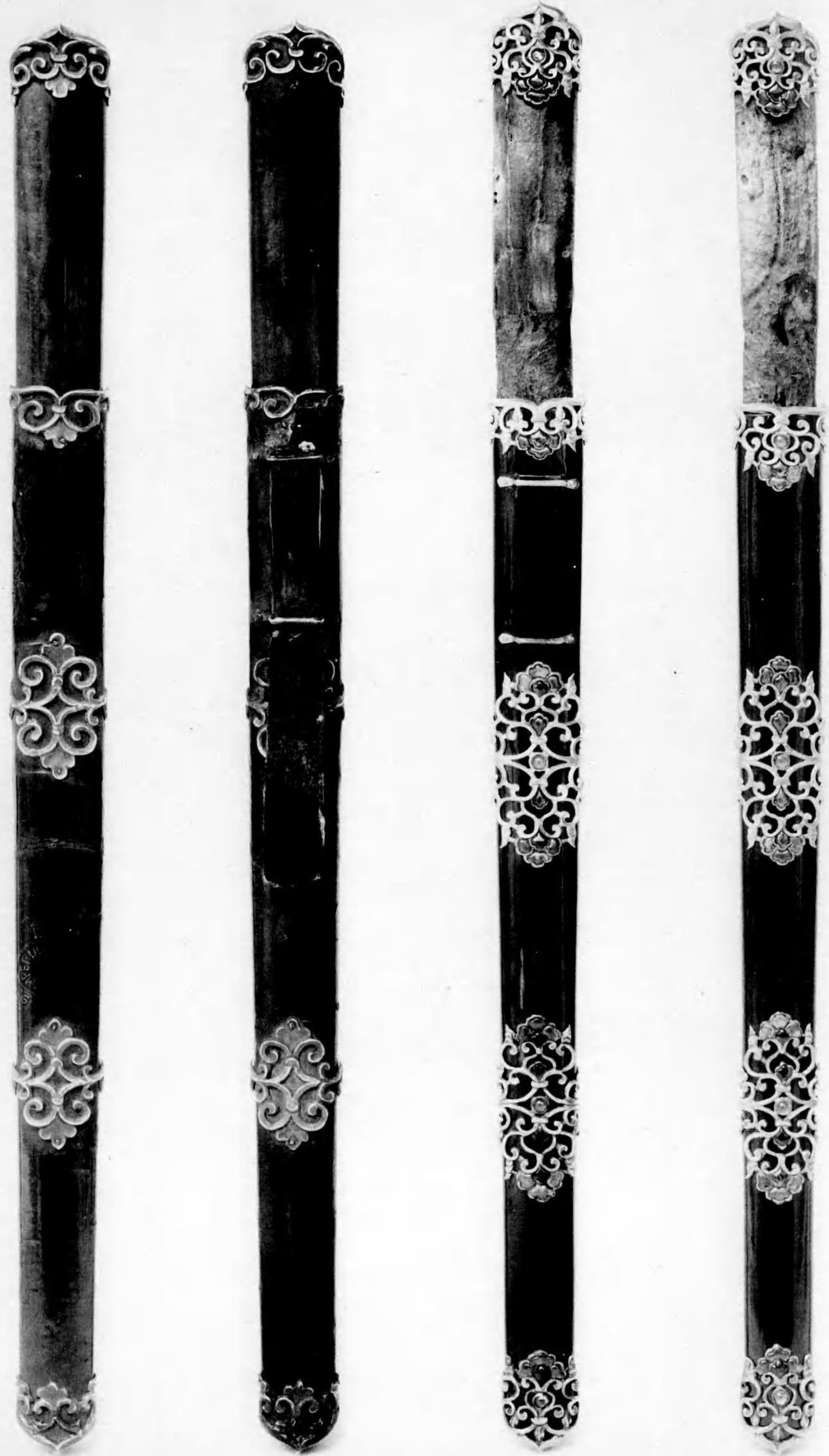
斑犀把漆鞘黃金葛形珠玉莊刀子

双長一六種 稍長二七種五 把長一五種九  
把は斑犀、鞘は黒漆塗、いづれも修補を加へてある。把头鞘口鞘尾鞘の責金具は黃金透彫葛形文に水精紫瑠璃碧瑠璃の玉を嵌し、水精の下には朱彩を沈めてある。把口と帯執鉸具は黃金。鞘尾だけは原品そのまゝであるがその他には多分に修補の手が加つてゐる。

斑犀把漆鞘銀漆莊刀子

双長一五種五 稍長二七種五 把長一六種四  
前掲の品とこれとが刀子のうちで最大のものである。目録に銀漆莊とあるいはれはつきりしないが、現に見るところでは各部白銀を裝したものである。紫皮帯執の殘闕を存してゐる。





此の、雲雲帯の、雲雲帯、  
 前傳の品、  
 雲雲一、  
 雲雲二、  
 雲雲一六、

雲雲一六、  
 雲雲二、  
 雲雲一、  
 雲雲二、  
 雲雲一六、

雲雲一六、  
 雲雲二、  
 雲雲一、

雲雲一六、  
 雲雲二、  
 雲雲一、  
 雲雲二、  
 雲雲一六、



第十九圖 刀子 二口

(原寸)

青石把漆鞘金銀莊刀子

双長一四種四 鞘長二五種 把長一四種六

把は淺綠色に處々白斑ある硬質の石、鞘は黒漆塗、把口は烏犀、鞘尾と鞘の黄金具とは銀鍍金葛形透彫に水精の玉を嵌し、嵌装の下に朱彩を施してある。名目を金銀莊としてあるが、他の例に従へば金銀珠玉莊といふべきである。把頭鞘口帯執鉸具は黄金を以て新に補つたもので、把頭は鞘尾に倣つて葛形透彫に水精を装してある。

烏犀把漆鞘樺纏黄金莊刀子

双長一五種七 鞘長二二種七 把長一一種七

把頭把口鞘口帯執鉸具鞘尾が黄金で、そのうち把頭と鞘口とは後補にかゝる。鞘の樺纏の間に珠玉を嵌してあつて、圖に白く見えるのが碧瑠璃、黒く光つて見えるのが朱彩を下に伏せた水精である。樺纏にも珠玉にも修補が加はつてゐる。







第二十圖 刀子 二口

(原寸)

水角把沈香鞘金銀山水繪金銀珠玉莊刀子

双長二二種二 鞘長一九種四 把長二二種五  
刃の本に一種あまり黄金の葛文がある。目録に鍍刃本とあるもの、一つであるが、この類のもの或は金泥漆描であるらしく、或は象嵌であるらしく、多くはいづれとも定め難い。以下この類を單に金鍍と記す。把は水牛角、鞘は沈香貼、把鞘ともに金銀泥を以て山水飛鳥を畫いてある。把口は金銅、鞘尾と帶執鉸具は銀鍍金で眞珠を嵌装してある。

沈香把鞘金銀花鳥繪金銀珠玉莊刀子

双長二三種 鞘長二〇種三 把長二二種八  
刃の本に金鍍あり、ことにこれは地を金にして花葉文を抜き出してある。把は木心に沈香を貼り、金泥を以て鸞鷲草花を畫き、鞘も沈香貼で金銀泥を以て花鳥雲形を畫いてある。把口は銀鍍金、鞘尾と帶執鉸具とは銀鍍金で眞珠を嵌装してある。







第二十一圖 刀子 四口

(原寸)

沈香把鞘金銀珠玉莊刀子一雙

双長二種 鞘長一八厘三 把長一〇厘八  
双本に葛形金鏤あり、一隻にはそれが半ば剝落してゐる。把口は銀鍍金、鞘尾と帶執鉸具は銀鍍金透彫に水精紫水精の玉を嵌入してある。一隻には組緒の殘闕を存してゐる。

斑犀把白牙鞘刀子

双長一〇厘九 鞘長一八厘九 把長一〇厘七  
把口は銀鍍金、鞘の口に近く花草形を刻み上げて紐通しをつくり、鞘尾に徑一耗の小孔を穿つてある。

沈香把假斑竹鞘樺纒金銀莊刀子

双長一〇厘五 鞘長一七厘九 把長一〇厘七  
把口と帶執鉸具とは銀鍍金、鞘尾は後の修補で黄金莊になつてゐる。







第二十二圖 刀子 四 口

(原 寸)

紫檀螺鈿把斑犀鞘金銀莊刀子一雙

双長一〇厘四 鞘長一五厘 把長一〇厘

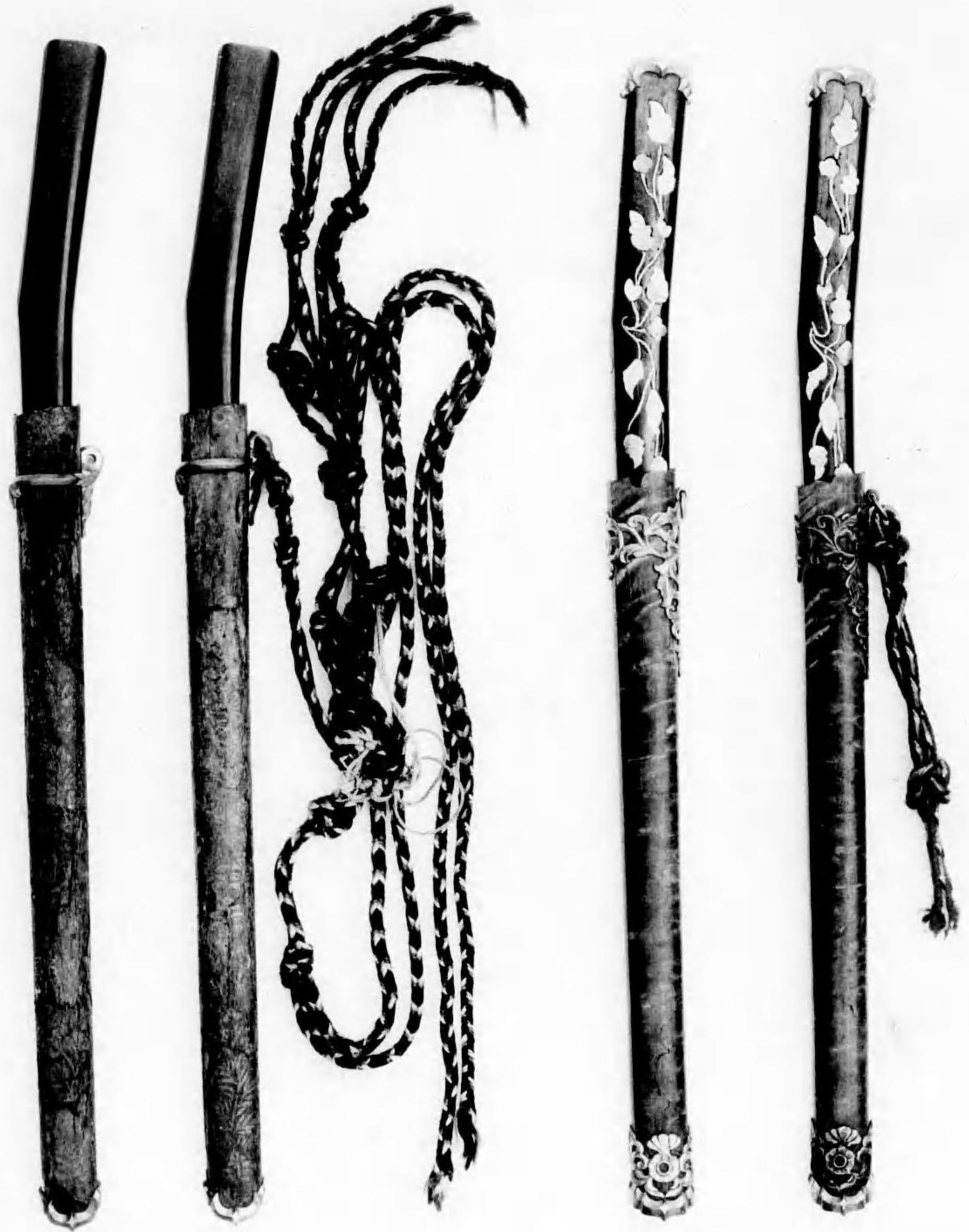
双本に葛形金鏤あり。把は紫檀に螺鈿の木の葉形を嵌し、黄金線の蔓形を以てこれを繋いである、兩側は圓に見えないが、そこに螺鈿の四瓣花文を嵌入してある。把頭把口鞘尾帶執鈹具は銀鍍金、右一隻には僅に舊緒を存してゐる、その鞘尾は後補。左一隻の莊具は悉く後補である。

斑犀把沈香銀鞘金銀莊刀子一雙

双長九厘三又九厘五 鞘長一六厘五 把長九厘八

鞘は沈香を貼し、それに銀泥を以て草花の圖を畫いてあるが、銀が黒くなつてゐて寫真でははつきりしない。鞘尾はともに新補品で、帶執鈹具は右の一隻のみ原品、それに残存の組緒を着けてゐる。





此一類の物品、多は古物に類する者なり。

この類の物品は、古物に類する者なり。其の類は、古物に類する者なり。其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

其の類は、古物に類する者なり。

卷二十二 刀 千 四 口



第二十三圖 刀子 四口

(原寸)

沈香把鞘金銀莊刀子一雙

刃長八厘二 鞘長一六厘六 把長一〇厘六

把口は銀鍍金。右一雙の鞘尾を新に補つてある。

斑犀把樹皮塗鞘白銀莊刀子一雙

刃長九厘六 鞘長一六厘四 把長九厘八

木心の鞘に薄く樹皮を貼り、蘇芳かと思はれる色に染めてある、それに圓文の見えるのは、樹皮の斑文であるらしい。把口は銀鍍金、舊緒二種を存してゐる。右一雙の鞘尾は後補である。







第二十四圖 刀子 四口

(原 寸)

棗把鞘四合刀子

刃長一〇厘六。一〇厘五。九厘八。九厘七

鞘長一九厘四 把長九厘五。九厘五。一〇厘五。一〇厘四

刃の本に葛形銀象嵌を施してある。把と鞘とは棗の模、把口は鐵に銀象嵌を施してある。

紅梅把鞘刀子

刃長八厘八 鞘長二五厘八 把長一〇厘二

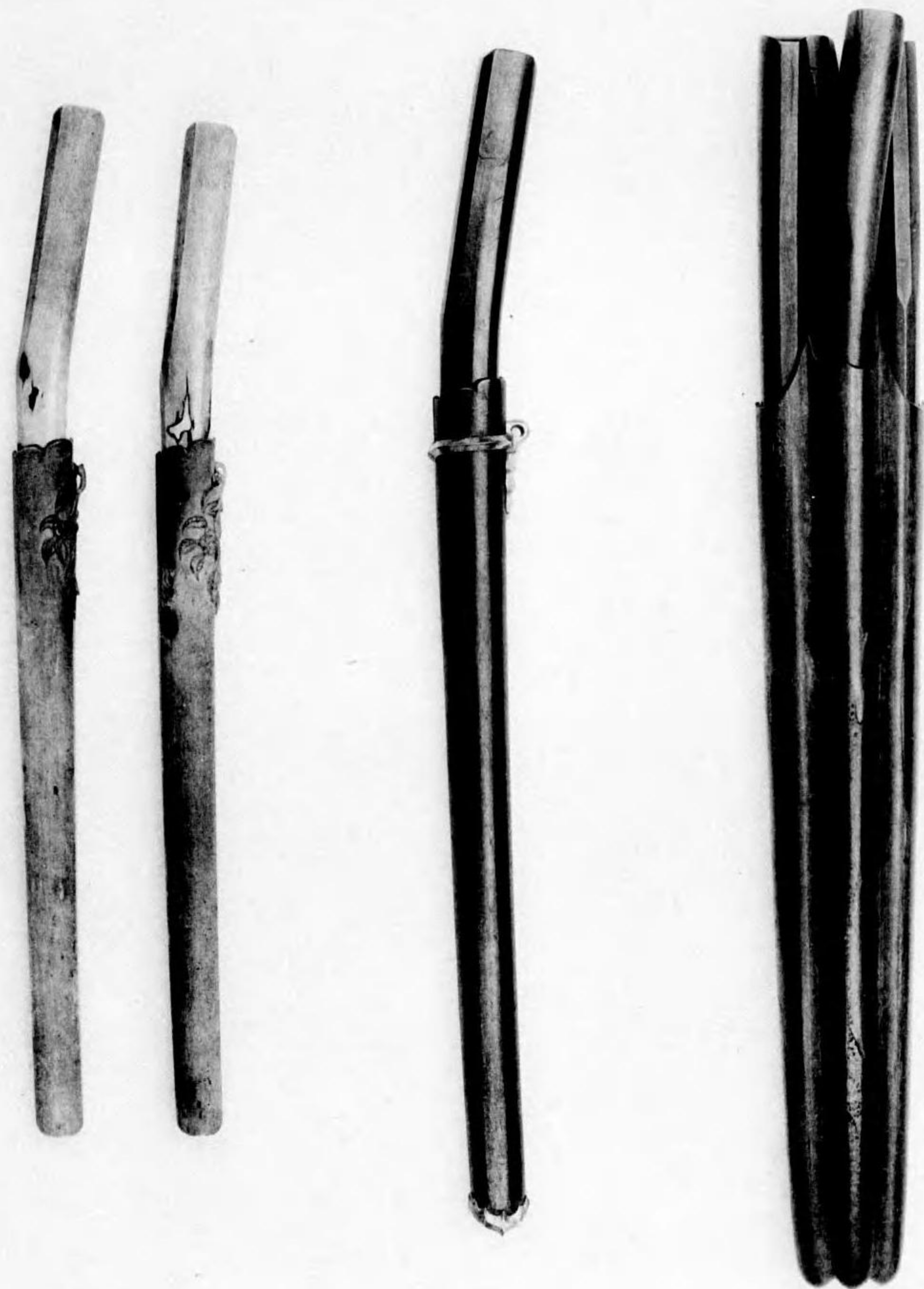
把口は銀鍍金、莊は悉く黄金を以て新に補つたものである。

白牙把鞘刀子一雙

刃長七厘八 鞘長二二厘八 把長九厘

把口は白銀。





器口白銀

式長一尺八寸 辨長二尺八寸 辨長一尺

白木辨器一尺一雙

器口白銀鍍金 辨長一尺八寸 黃金一尺一雙 辨長一尺一雙

式長一尺八寸 辨長一尺八寸 辨長一尺二寸

漆器辨器一尺一雙

器口白銀鍍金 辨長一尺八寸

器口白銀鍍金 辨長一尺八寸 辨長一尺八寸 辨長一尺八寸

式長一尺八寸 辨長一尺八寸 辨長一尺八寸

式長一尺八寸 辨長一尺八寸 辨長一尺八寸

漆器辨器一尺一雙

第二十四圖 尺 寸 四 口

四 寸



第二十五圖 刀子 五口

(原 寸)

黒 柿 把 鉋

刃長六糎五 把長一五糎八

把口は金銅。新造黒柿の鞘を具す。

沈香把瑠璃鞘金銀莊刀子

刃長六糎三 鞘長一一糎二 把長七糎八

把は新補、形が直で、他の品のやうな屈りを持つてゐないが、破損した原品に倣つて造つたものらしいから、據のあること、思はれる。鞘は木心金薄瑠璃貼である。鞘口鉸具の紐通しの部分は細口徑長筒形になつてゐるが、圖では背面に隠れて見えない。

白 牙 鞘 刀子

刃長七糎五 鞘長一二糎八

身と鞘とは原品、白牙の把と金銀莊とは後補品である。

牟 久 木 鞘 刀子

鞘長一四糎八

鞘のみ原品、身牟久木の把と金銀莊いづれも新品である。

白 犀 鞘 刀子

鞘長一二糎二

これも鞘のみが原品で、しかも鞘口と鞘尾とに修補を加へてある。身、白犀の把、金銀莊は悉く後補品である。







第二十六圖 刀子五口

斑犀把紅牙撥鍍鞘刀子

及長五種二 鞘長九種 把長五種五

斑犀把彫繪鞘金銀莊刀子

及長七種七 鞘長三種 把長八種五

鞘は木心、淡緑地に朱黄梅縁の跡形を以て草花文を描き、その上を瑛瑛で覆復したもので、表裏とも同じ文様である。把口は新鞘。帯鍍鍍其は第三十圖烏犀把白牙鞘金銀莊刀子のそれに倣つた形式で、新に鞘つたものである。

樺纏把鞘白銀玉蟲莊刀子

及長八種三 鞘長一五種 把長九種

一雙のうち二隻を圖す。把は白牙、把口は銀鍍金、把と鞘との機關は濃淡二色を交へ組んで、散文菱文を編み出してある。玉蟲飾は鞘に四箇處あり、鞘口の縁には朱を塗つてある。帯鍍の環は新に鞘つたものである。

犀角把白銀碧形鞘珠玉莊刀子一雙

及長八種四 鞘長三種八 把長九種一

鞘は木心に漆芳を塗り、全面に白銀透彫形を覆ひ、唐草の花心に琥珀、花鱗に小真珠を嵌したものである。組紐は新品。本鞘は黃楊木。

拵するに拵の文字「櫛」は櫛の古文で、この外中食納物獸物牌に「櫛夫人」、南食納物諸數の附牌に「櫛夫人奉」とあり、夫人が大佛のために鑿に喜捨されたことを語つてゐる。續日本紀天平勝寶元年四月叙位の項に「正三位櫛夫人從二位」とあり、大日本史に「夫人廣岡古那可智、正四位上櫛佐爲女也、天平九年從三位 進正二位、寶字元年吉佐櫛留櫛、則廣岡朝臣、三年七月薨」とあるのがこの人で、即ち此刀子の獻者は聖武天皇の夫人廣岡古那可智、その父は諸兄の弟櫛佐爲である。







第二十七圖 刀子 二口 一箇 寸

斑尾把練牙鍍鞘金銀莊刀子

及長七種五 鞘長三種二 把長七種九

鞘は淺縹染牙に草花鳥雲蝶を鍍鑲し、間々

紅彩を點してある。把口と鞘尾とは黄金裝

で後の補足である。

黄牙彫繪把紫牙鍍鐵鞘金銀莊刀子

及長九種一 鞘長二五種三 把長二〇種

把は牙を黃色に染めた上に、朱緑白の彩を

以て蝶鳥花の繪を描き、鞘は淡紫色染牙に

蝶鳥草花樹木等を鍍鑲したものである。莊

具のうち把頭は黄金で、後に補ったもので

ある。





五五

且のこゝに所記の如き者あり、其の形は、  
製法亦亦、木等、其の形は、  
是の如き其の形は、其の形は、  
其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、  
其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、

其の形は、其の形は、其の形は、



第二十八圖 刀子 四口 四口 四口

水角把漆鞘三合刀子

及長八種一。八種四。七種七

帶長一五種六 把長九種五。一〇種一。九種七

鞘口三合の縁まつたところに白銀の鉸具をつけ、それに小孔を穿つて緒を通すやうになつてゐる。把口は金漆。

斑尾把水角鞘金銅莊刀子

及長七種三 帶長二種三 把長八種五

把口は銀鍍金、帶鉸鉸具は後補品。

黒柿把鞘金銀莊刀子

及長八種九 帶長五種六 把長一〇種

把口は銀鍍金。鞘尾と帶鉸鉸具とは後に補つたものである。

黒珊瑚把白銅鞘金銀珠玉莊刀子

及長一〇種 帶長一五種八 把長一〇種二

把は黒珊瑚と鍍せられるが、黒曜石の類と見る方が正しいやうである。把口は銀鍍金。鞘尾と帶鉸鉸具とは銀鍍金寫形文透彫で、黒珊瑚の玉を嵌めてある。







第二十九圖 刀子 六口 一副

白犀把鞘金銀莊刀子一雙

及長九種 鞘長一五種二 把長九種九

及の本に寫形文を金鑲す。把口は銀鍍金。

斑犀把金銀鞘刀子一雙

及長七種 鞘長二種八 把長七種六又七種九

把口は銀鍍金、一隻のそれは後に補足した

もので、形を異にしてゐる。鞘は全體魚、子

地に寫形文を毛彫してある。

琥碧把金銀鞘刀子一雙

及長六種三 鞘長一〇種四 把長六種七

琥珀の把は原品破損し、新品を以て之に換

へ補つてある。把口は銀鍍金。鞘は全體魚

子地に寫形文を毛彫してある。







第三十圖 刀子五口 並す

鳥 岸 把 刀 子

及長八種六 把長一〇種

把口は銀鍍金。白牙の鞘は新に補つたもので、第二十一圖刀子のそれに倣ひ、少しく長さをつめたものである。

斑 岸 把 鞘 刀 子

稍長九種一 把長五種三

身は新補品。銀鍍金の把口も新補である。

鳥 岸 把 白 牙 鞘 金 銀 莊 刀 子

及長六種 稍長二種五 把長八種

把口鞘尾帯鍍銀具いづれも銀鍍金。

牟 久 木 把 鞘 金 銅 莊 刀 子

及長七種八 稍長二種六 把長八種三

把口鞘尾帯鍍銀具いづれも金銅。

白 牙 鍍 銀 把 鞘 金 銅 莊 刀 子

及長七種五 稍長三種三 把長九種

把と鞘とは白牙に花鳥を鍍銀し、赤線の點彩を施したもので、彩色今僅に残存してゐる。把口金銅。





次より、筆の全長を測り、その筆の先を測る。筆口を測る。  
筆の筆毛の長さを測る。筆の筆毛の長さを測る。

長六寸五分 筆三寸三分 筆長六寸

白糸製筆野間金剛筆口筆

筆口筆毛の長さを測る。筆の筆毛の長さを測る。

長六寸八分 筆三寸二分 筆長八寸三分

辛八木野間金剛筆口筆

筆口筆毛の長さを測る。筆の筆毛の長さを測る。

長六寸四分 筆三寸一分 筆長八寸

鼠頭野間白糸製筆口筆

筆口筆毛の長さを測る。筆の筆毛の長さを測る。

長六寸四分 筆三寸一分

鼠頭野間筆口筆

である。

十一寸の筆の長さを測る。筆の筆毛の長さを測る。  
筆口筆毛の長さを測る。筆の筆毛の長さを測る。

長八寸六分 筆三寸二分

鼠頭野間筆口筆

筆三寸四分 筆口筆毛の長さを測る



第三十一圖 刀 子 十 口 圖 寸

白牙撥鐵鞘刀子 及長四種一 鞘長八種一  
把口は銀鍍金鞘は白牙に草花文を撥鐵し、紅緑の彩を貼してある。把は斑犀の新製品。

斑犀把紅牙撥鐵鞘刀子 及長四種三 鞘長八種一 把長四種六

把は折れ損じたのを補足してある。把口は新柳。

左記六口は圖の上段 右から順に列べてある。

鳥犀把鞘刀子 及長三種二 鞘長五種四 把長四種四

白犀把鞘刀子 及長三種二 鞘長五種六 把長三種

白犀把水角鞘刀子 及長二種一 鞘長五種六 把長三種

斑犀把水角鞘刀子 及長三種五 鞘長四種二 把長三種二

以上四口の把口はいづれも銀鍍金。把柄の部分に白く不規則に見えるのは、破損の箇處を黄金で修補したものである。

白犀把刀子一雙 及長二種又二種二 把長二種九又三種

一雙としてあるが、及ば二隻鍍造、一隻赤造、把は右一隻斑犀を以て補つてある。把口はいづれも銀鍍金、鞘は水角の新製品

左記は圖の下段 右から順に列べてある。

白犀把鳥犀鞘刀子 及長三種三 鞘長五種六 把長四種三

把口は銀鍍金。

次に鞘を脱したる刀子圖は、本圖右端の白牙撥鐵鞘刀子の身を見せたものである。

白牙把水角鞘小三合刀子 及長五種二 把長六種三

及長五種二 把長六種三

鞘長九種三

第一、第二、刀子の三合鞘になつてゐるが、刀子はその把と紐通しの小孔を穿つてある。把口はいづれも銀鍍金、鞘口のところは

いづれも新製品である。







第三十二圖 黄楊木把鞘刀子一雙

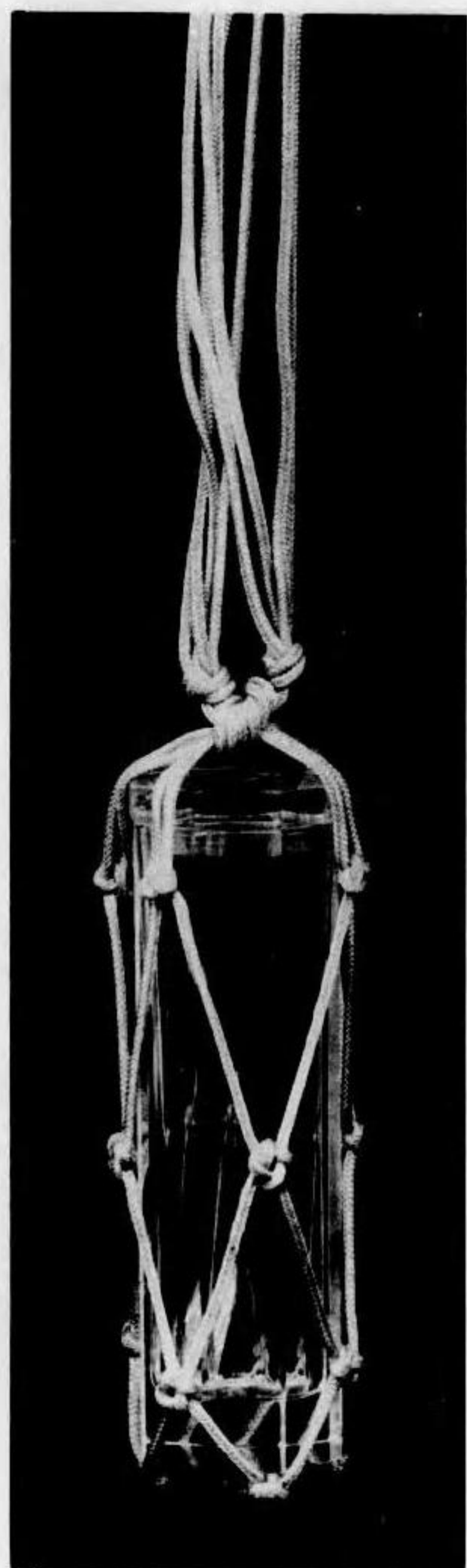
雜色 緞綬帶

水精 長合子 殘闕

及長一 種四 鞘長一九種 把長一一種

刀子が帯に繋著せられた姿をこの遺品で見ることが出来る。刀子は刃の本に萬形金鍍あり、把口は銀鍍金、帶執鉸具は白銀、鞘尾は黄金の新補品である。

帯は平打の條帶で、その中央邊に雜色の組緒を結び、それから細い白色組緒を數條出してある。雜色組緒の一端に結びつけられて、圖上で斜に黒く見えてゐるのは、織成花文金糸入の小裂である。白組緒の末に刀子が繋著せられてゐるやうに、他の數條にもそれ／＼佩びものがついでゐたことと思はれる。就中圖中右に出てる組緒は、その末が袋に編まれて、水精の合子（六角長形、藥籠蓋造、内側圓筒）を納めてあつたもので、合子の蓋と盒の破片とをその傍に圖してある。左圖はその合子を復原模造して袋に納めたものである。



(縮寫三分ノ一)







第三十三圖 紅牙擔鏡尺四枚之一

○繪字ノ丸

長三〇厘二幅二種九五 厚八耗五  
北倉納物紅牙擔鏡尺二枚（第一輯第二  
十六圖、第二十七圖）と同種のもの更  
に四枚を中倉に藏めてある。紅色染象  
牙に撥鏡を施した手法は同じであるが、  
それ／＼圖様を殊にして、廣狭一なら  
ず、長短にも少差がある。  
本圖の尺は一面に十區を劃し、劃内交  
互に二種の唐花文と各種の鳥獸花文と  
を配し、一面には區劃なく、岩石花卉  
奔獸飛禽を描き、兩面とも處々に黃綠  
の點彩を施し、側面には四瓣の花文を  
配列してある。





頭... 了... 各...  
 心... 便... 了... 了... 了... 了...  
 未... 明... 使... 高... 支... 前... 中... 斷... 隔... 上... 人... 間... 各... 處... 皆...  
 全... 同... 了... 一... 氣... 貫... 注... 了... 了... 了... 了...  
 其... 中... 二... 條... 已... 經... 拆... 穿... 了... 去... 了... 去... 了... 去... 了...  
 未... 能... 心... 其... 只... 一... 條... 只... 十... 幾... 寸... 長... 了... 了... 了...  
 了... 其... 餘... 均... 已... 斷... 成... 碎... 片... 了... 了... 了... 了...  
 子... 其... 心... 已... 斷... 成... 碎... 片... 了... 了... 了... 了...  
 未... 以... 前... 所... 說... 的... 話... 了... 了... 了... 了... 了... 了... 了... 了...  
 口... 說... 的... 話... 也... 不... 能... 信... 了... 了... 了... 了... 了... 了... 了... 了...  
 十... 六... 日... 到... 了... 十... 五... 日... 到... 了... 十... 四... 日... 到... 了... 十... 三... 日... 到... 了...  
 各... 處... 均... 有... 人... 到... 了... 了... 了... 了... 了... 了... 了... 了...

...

...

...



第三十四圖 紅牙撥鏤尺四枚之二

(箱蓋十分ノ九)

長三〇釐七 幅三釐〇五 厚九釐

一面を十區とし、交互に唐花鳥獸を配して、各區文様を殊にし、他の面は上半に門牆家屋樹木小禽を描き、下半に花鳥文を鏤め、兩面とも處々に線彩を點し、縁邊の細い廓内に小花文を列べてある。側面は四瓣花文の列間に品字形の文を置いてある。この一枚に限り一端に近く圓い小孔を穿つてある。





第三十圖 漆器裝飾之四例

此四例之漆器裝飾，其風格與前圖無異，惟其圖案之內容，則各具特色。第一例為花卉圖案，第二例為幾何圖案，第三例為動物圖案，第四例為人物圖案。此四例之裝飾，均採用黑漆為底，以紅、黃、白等色漆繪出圖案，其線條清晰，色彩鮮明，展現了漆器裝飾之多樣性與藝術性。



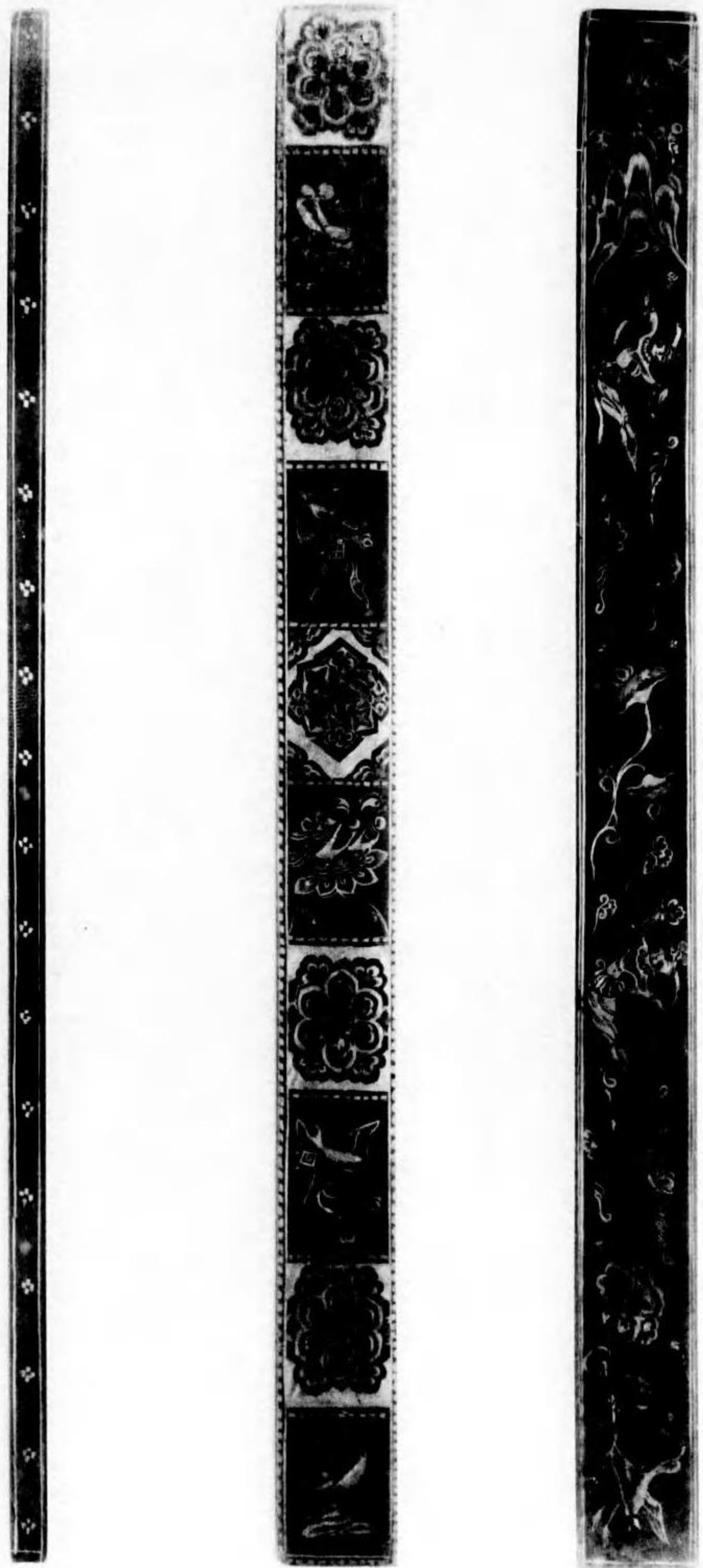
第三十五圖 紅牙撥鏤尺四枚之三

(縮寫十分之九)

長二九釐七 幅二釐七 厚七耗五

一面を十區に劃し、四箇の唐花文、一箇の菱形文、五種の花鳥文を劃内に納め、その反面は區劃を設けず、山岳、天人、蓮華、飛雲、鳥蝶を圖し、兩面とも黄緑の點彩を施してある。側面は十字形の幾何文様を一行に配してある。





の装束文飾は一様な様式である。  
 面々を黄緑の装束に染めてある。背面は十字模  
 様に染められ、山崎夫人の装束は黒地に白の  
 文、正勝の装束は文を内側に染め、その裏面に  
 一面は十字模様に、四面の装束は、一面の装束

其二式用子 二式用子 別子用子

卷三十五圖 五平装束只四対之三

(五平装束)



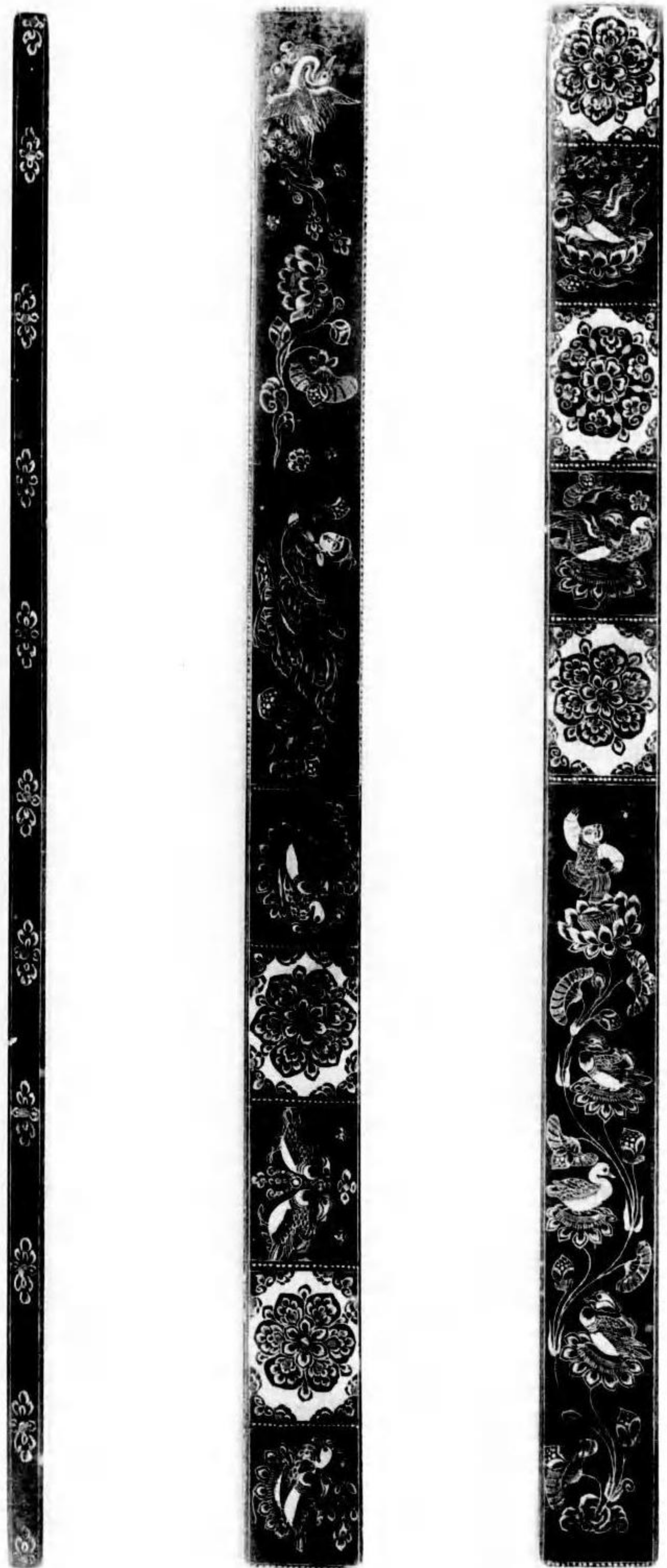
第三十六圖 紅牙撥鏤尺四枚之四

(縮寫十分ノ九)

長二九釐五五 幅二釐二五 厚七釐五

一面は全尺を縦に見て、上半を五區とし、二種の唐花を三區に配り、その間の二區には蓮花座上一對の鸞を圖し、下半は區劃を撤して一莖の蓮花唐草を生ひ立たせ、蓮座に踊る童子、花上に棲む水禽を描いたもの。他の一面はこれを横に見て、右半を五區に分け、唐花鸞を交互に配し、左半に花咋鳥蓮花迦陵頻伽を刻んだもので、兩面いづれも點々黄緑を彩してある。側面は花文九箇を以て全長を十分し、半花文を以て兩端をとめてある。





卷三十六 錦糸紙の巻

錦糸紙とは、昔は、  
絹の糸を染めて、  
紙に織りこませ、  
その美しい模様を  
用いた紙のことである。  
現在は、絹糸を  
用いた紙は、  
ほとんど見られず、  
絹糸を染めて、  
紙に織りこませ、  
その美しい模様を  
用いた紙のことを  
錦糸紙と呼ぶ。



第三十七圖 尺

四枚 (原寸)

未造了牙尺二枚

長各二九釐六 幅各二釐九五 厚一釐三五  
白象牙の素材である。前諸圖の撥鏤尺には長短の差があるが、この二枚と第一輯第三十圖の白牙尺二枚とは、精密に長さを等うしてゐる。

斑 厚 尺

長二九釐四五 幅二釐八 厚八耗  
犀角を材とし、半部は一分目、半部は五分目を盛り、刻線に朱を入れた上に金箔を押してある。金箔は多く剝落してゐる。この尺は前掲の二枚よりは僅に短い。

木 尺

長四四釐五 幅三釐 厚九耗五  
桑かと思はれる材で、總長一尺五寸、三寸毎に兩縁交互に一分の目を盛り、一端に近く小孔を穿つてある。兩端から五寸目のところに、銀泥を以て花鳥蝶の圓文を置いてあるが、圖にははつきりあらはれない。











第三十八圖 筆

三

枝

(原 寸)

梅羅竹管牙頭黃金莊筆

管長二〇糎三 徑二糎二

毫は失せて心の巻紙が露れてゐる。管は梅羅竹、蓋斑文に依つて名づけたものであらう、兩端のかざりは黄金、下縁は原品で上縁は新補品である。牙頭に遊環二枚を削り浮べてあるが、圖ではそれが固著して見える。新造の帽を添へてある。

沈香斑竹樺纏管斑竹帽白銀莊筆

管長一八糎五 徑二糎三 帽長九糎九

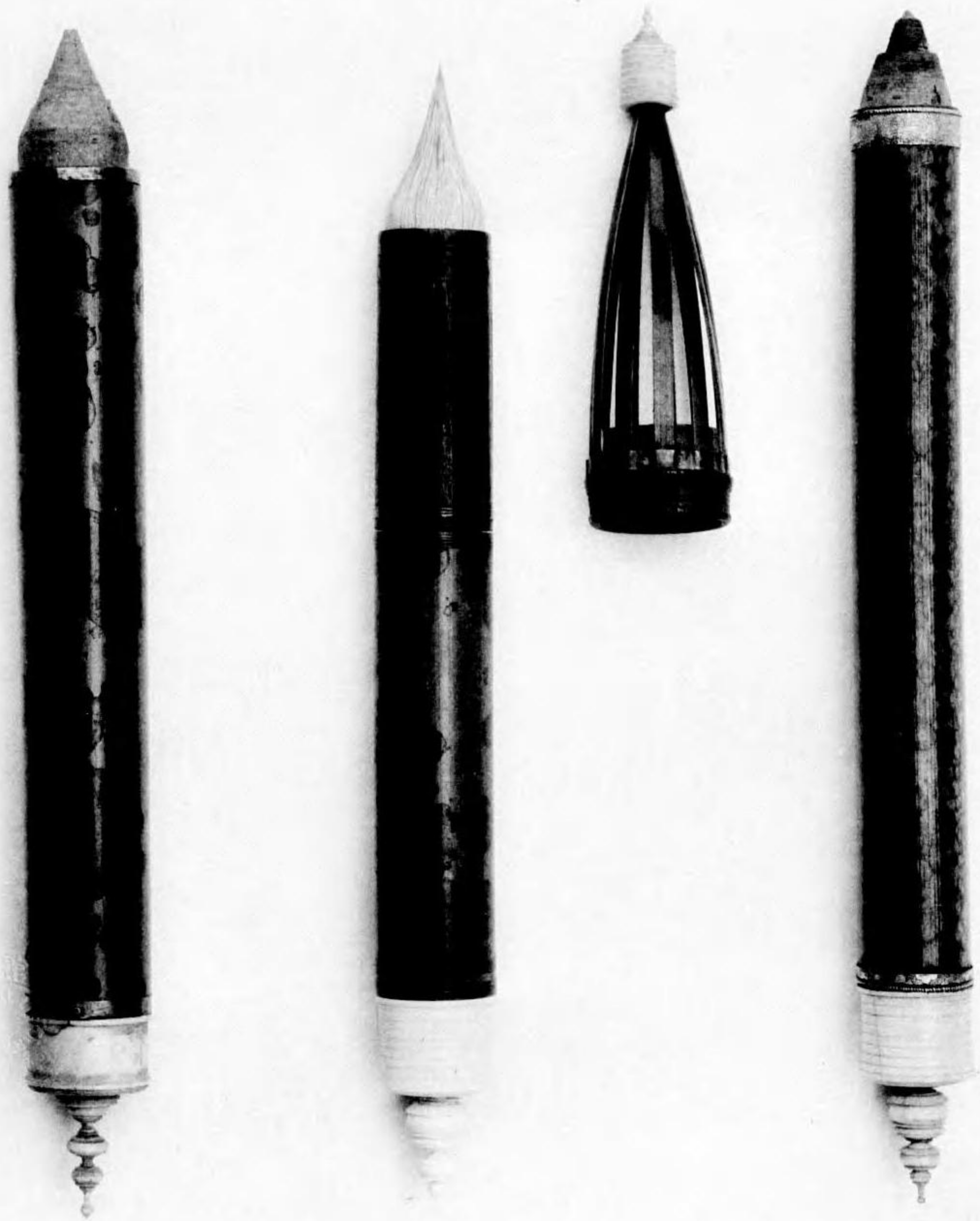
上部は沈香貼、下部は斑竹で、各部兩端に近く樺を纏いてある。毫と白牙頭とは新補。右肩に圖したのはその帽、口は紫檀銀莊、頭は白牙である。

斑竹管牙頭白銀莊筆

管長一九糎六 徑二糎三

毫と帽とを供し、新造の帽を添へてある。





筆の構造を述べ、各部の構造を述べた。

第一式第六 第二式三

第三式第一 第四式第六

第五式第一 第六式第六 第七式第六 第八式第六 第九式第六 第十式第六

第十一式第六 第十二式第六 第十三式第六 第十四式第六 第十五式第六 第十六式第六 第十七式第六 第十八式第六 第十九式第六 第二十式第六

第二十一式第六 第二十二式第六 第二十三式第六 第二十四式第六 第二十五式第六 第二十六式第六 第二十七式第六 第二十八式第六 第二十九式第六 第三十式第六

第三十一式第六 第三十二式第六 第三十三式第六 第三十四式第六 第三十五式第六 第三十六式第六 第三十七式第六 第三十八式第六 第三十九式第六 第四十式第六

第四十一式第六 第四十二式第六 第四十三式第六 第四十四式第六 第四十五式第六 第四十六式第六 第四十七式第六 第四十八式第六 第四十九式第六 第五十式第六

第五十一式第六 第五十二式第六 第五十三式第六 第五十四式第六 第五十五式第六 第五十六式第六 第五十七式第六 第五十八式第六 第五十九式第六 第六十式第六

第六十一式第六 第六十二式第六 第六十三式第六 第六十四式第六 第六十五式第六 第六十六式第六 第六十七式第六 第六十八式第六 第六十九式第六 第七十式第六

第七十一式第六 第七十二式第六 第七十三式第六 第七十四式第六 第七十五式第六 第七十六式第六 第七十七式第六 第七十八式第六 第七十九式第六 第八十式第六

第八十一式第六 第八十二式第六 第八十三式第六 第八十四式第六 第八十五式第六 第八十六式第六 第八十七式第六 第八十八式第六 第八十九式第六 第九十式第六

第九十一式第六 第九十二式第六 第九十三式第六 第九十四式第六 第九十五式第六 第九十六式第六 第九十七式第六 第九十八式第六 第九十九式第六 第一百式第六

第三十八圖 筆 三 対

三 対



第三十九圖筆 三 枝

(原 寸)

斑竹管帽牙頭筆

管長二九種三 徑二種 帽長八種九

圖上で次の一枝を隔て、左上にあるのがこれの帽で黄楊木銀莊の口、紫檀の頭をつけてある。

斑竹管紫檀頭筆

管長一九種八 徑一種九

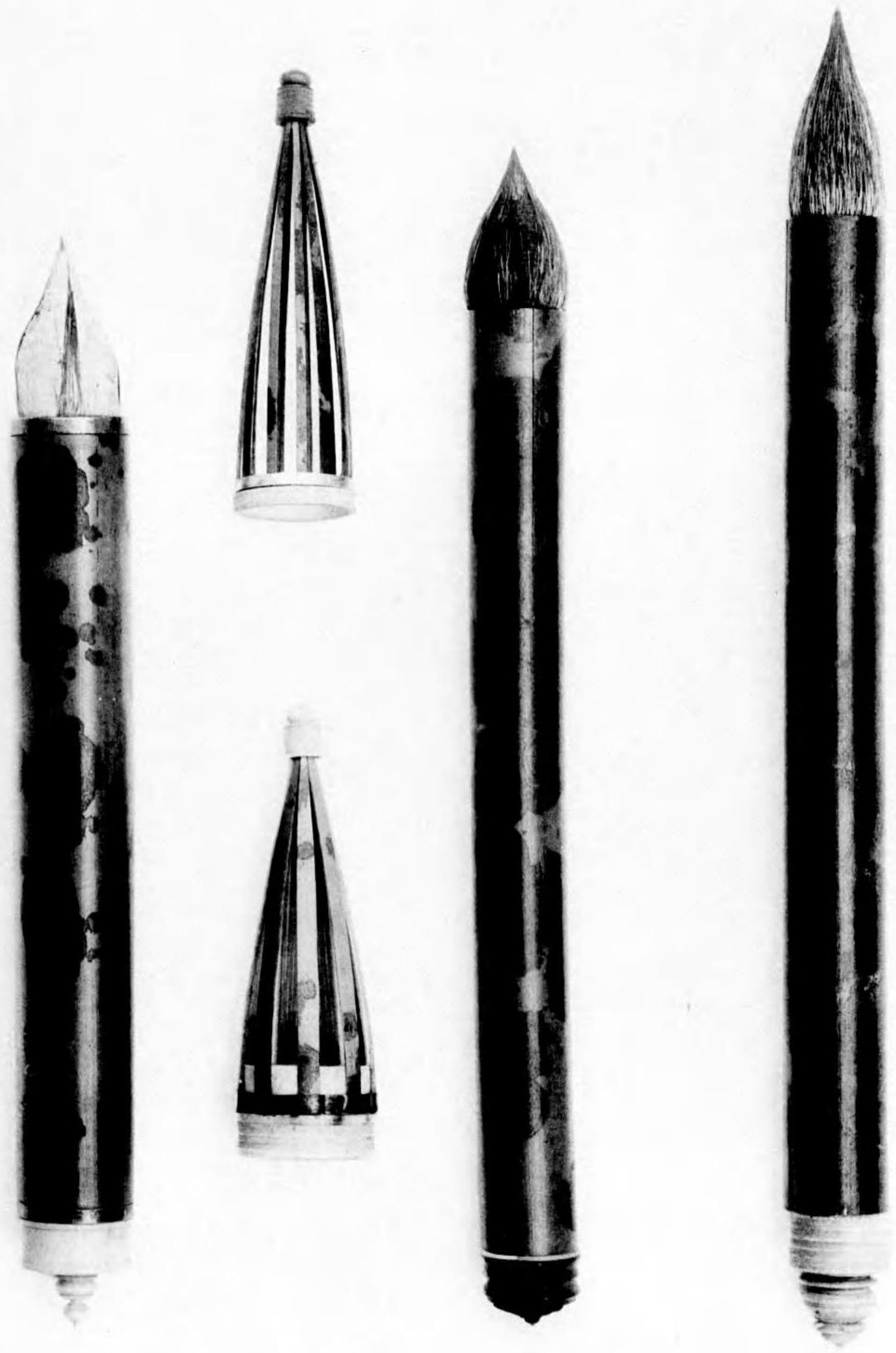
毫は過半失せてゐる。紫檀頭に白牙を裝してある。新造の帽を添ふ。

斑竹管帽牙頭白銀莊筆

管長一七種七 徑二種三 帽長八種八

毫は僅に存してゐる。帽は白牙銀莊の口、白牙の頭である。





筆の形が異なる。筆の白米の穂の口、白米の穂の口。

管長一、七センチ、第二種三、管長八センチ

筆の穂が異なる。筆の穂の口、白米の穂の口。

筆の穂が異なる。筆の穂の口、白米の穂の口。

管長一、七センチ、第一種八、管長八センチ

筆の穂が異なる。筆の穂の口、白米の穂の口。

筆の穂が異なる。

筆の穂が異なる。筆の穂の口、白米の穂の口。

管長一、七センチ、第二種三、管長八センチ

筆の穂が異なる。筆の穂の口、白米の穂の口。

筆三十式圖 三 景



第四十圖 筆三枝 屏す

豹文竹管篠竹權纏帽牙頭筆

管長三〇種三徑二種八五帽長七種七

毫を失つてゐる。帽の口に白革を巻い

てある。

斑竹管帽筆

管長一九種徑二種二帽長一種

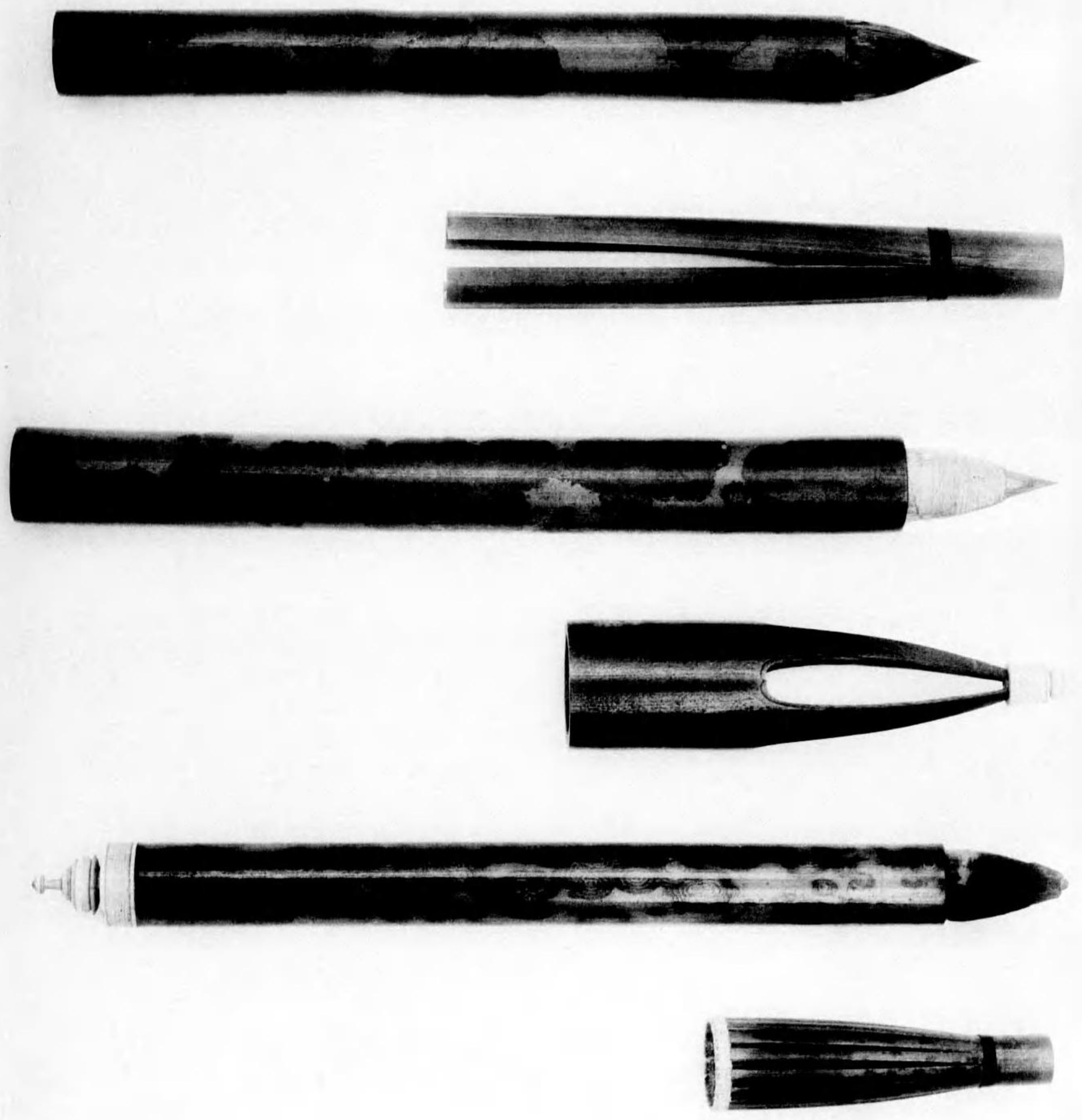
毫を失つてゐる。帽の頭は黄楊木を以

て新に補つたものである。

斑竹管篠竹權纏帽筆

管長二七種四徑二種帽長三種八





管長一丈四寸 第三節 筆長三寸八  
 瓶竹管繪管筆 筆

丁濃口細くはりのなる。  
 筆先尖くなる。筆の加減は筆水が良  
 管長一丈四寸 第三節 筆長二寸  
 瓶竹管 筆 筆

了る。  
 筆先尖くなる。筆の口は白筆先を  
 筆長二寸 第三節 筆長八分 筆長六分  
 倭文竹管繪管筆 筆 筆

筆四十圖 筆 三 終 七



第四十一圖 筆 五 枝 ① 寸

斑竹管煤竹帽筆

管長一七種二 徑二種四 帽長八種三

圖上で左に二枝を附て、上段の帽が、この筆に属するもので、煤竹の圓筒形である。

斑竹管篠竹帽筆三枝之一

管長五種一 徑二種三 帽長七種

帽は篠竹圓筒形、圖を略す。

斑竹管篠竹帽筆三枝之二

管長一七種四 徑三種 帽長八種三

帽は左に圖す、亦圓筒形である。

假斑竹管帽筆三枝之一

管長一四種三 徑一種四 帽長六種三

蓋を失つてゐる。帽は圓筒形、圖を略す。

篠竹管帽筆

管長一七種四 徑一種四 帽長六種八

管の一端二種七ほど表面を削つて、末漸く細く細くなつてゐる。この部分にかざりがついてゐたものか、或は筆を用ふる時、この一端に帽を被せたものか。帽は圓筒形、圖を略す。







第四十二圖

筆 三 枝

(原 寸)

斑竹管篠竹帽筆三枝之三

管長二〇種六 徑二種五 帽長七種五

帽は圓筒形、左列上段に圖してある。

假斑竹管帽筆三枝之二

管長二二種八 徑一種九 帽長七種二

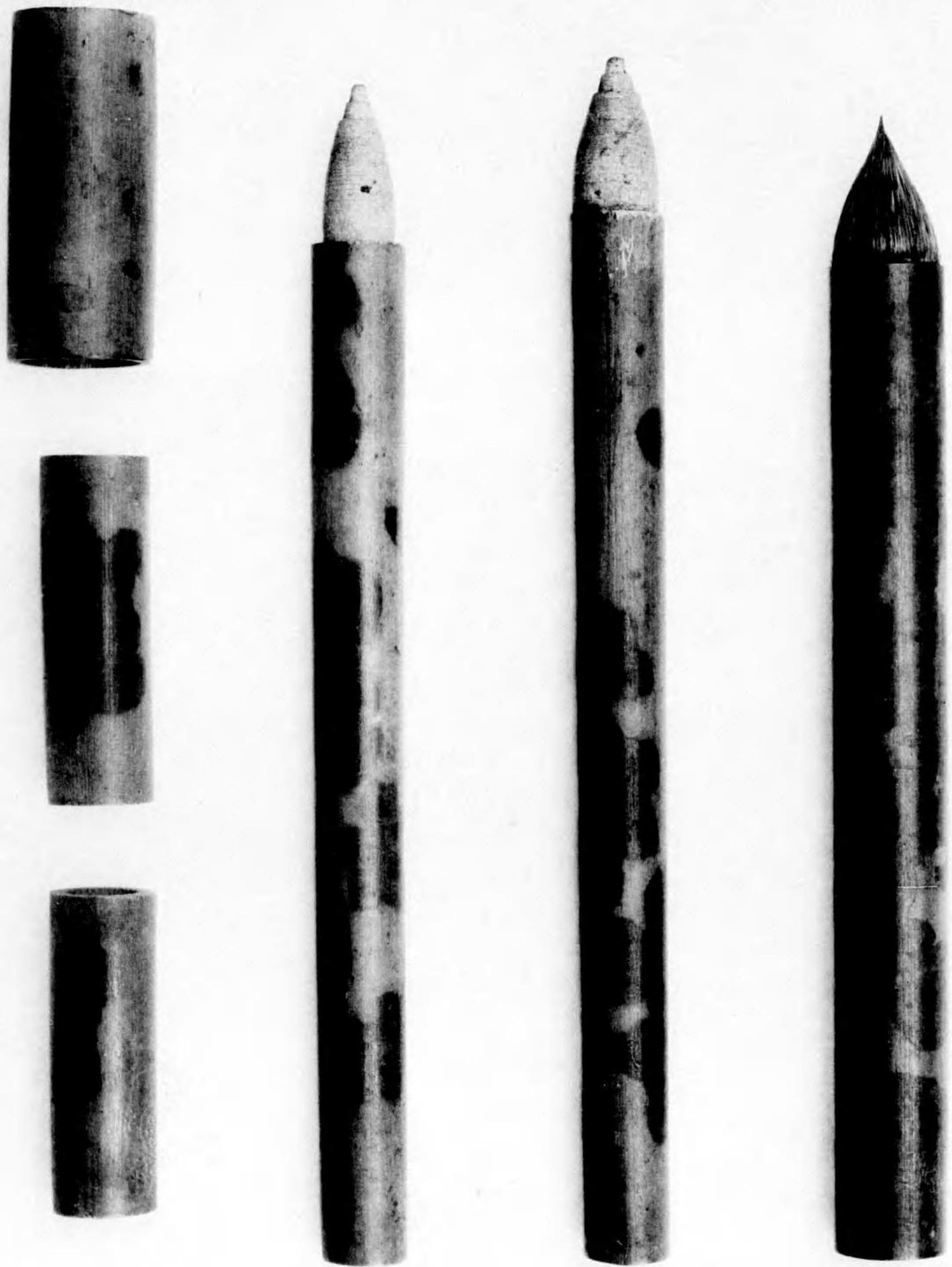
毫を失つてゐる。左中央の圖がこれの帽である。

假斑竹管帽筆三枝之三

管長二二種三 徑二種 帽長六種七

毫を失つてゐる。





第四十二圖 筆 三 枚

筆 三枚  
 第一枚 筆頭 墨色 濃  
 第二枚 筆頭 墨色 淡  
 第三枚 筆頭 墨色 極淡  
 筆 三枚  
 第一枚 筆頭 墨色 濃  
 第二枚 筆頭 墨色 淡  
 第三枚 筆頭 墨色 極淡



第四十三圖 墨十四挺之内 其一

|       |      |      |
|-------|------|------|
| 右長二種八 | 輕三種四 | 厚二種三 |
| 長三種二  | 輕二種九 | 厚二種六 |
| 長二種一  | 輕二種九 | 厚二種二 |
| 長二種五  | 輕三種二 | 厚二種二 |
| 長二種六  | 徑二種三 |      |
| 長五種九  | 徑〇種九 |      |
| 左長二種  | 輕二種六 | 厚二種一 |

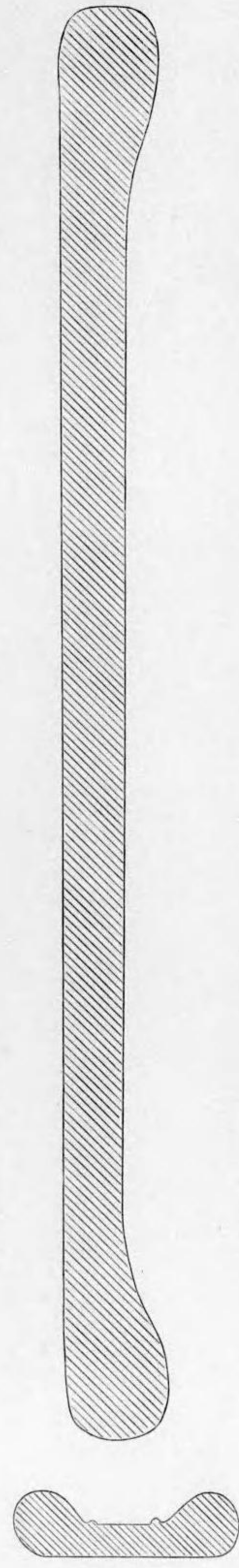
墨十四挺のうち二挺は筒形、他はいはゆる船形  
 で、古文書に墨何挺と算してゐることを直書さ  
 せる。船形の三挺と筒形の二挺とは關係があ  
 る。これを本圖以下三圖に分載するが、一挺特  
 に大なるもの（長五種、輕六種三、厚二種）  
 のみ圖を略した。

建久四年の御封藏開檢條に「繪一合」の納物  
 として「墨二挺、硯一基、會前加納墨五挺」等  
 を載せ、附記して「天保實五年七月一日檢納  
 概略如此」云々とあるから、普通墨がついてゐ  
 たものである。今この題を伏してゐるが、現  
 存十四挺のうち前記七挺の品が加つてゐると  
 見て違ひはなからう。









第四十四圖 墨十四挺之内其二 (約原寸)

右長二五種四 幅三種三 厚一種六

長二五種四 幅三種四 厚一種六

長二六種一 幅三種三 厚一種三

左長二六種六 幅四種二 厚一種二

このうち二挺の表に陽刻文が押されてゐる。右は『新羅武家上墨』左は『新羅楊家上墨』とあり、○のところに朱點を打つてある。蓋し武家・楊家は墨工の家名か。上墨は墨の品位の稱であらうことは、古文書に凡墨中墨の名のあることから推して考へられる。







第四十五圖 墨十四挺之内 其三

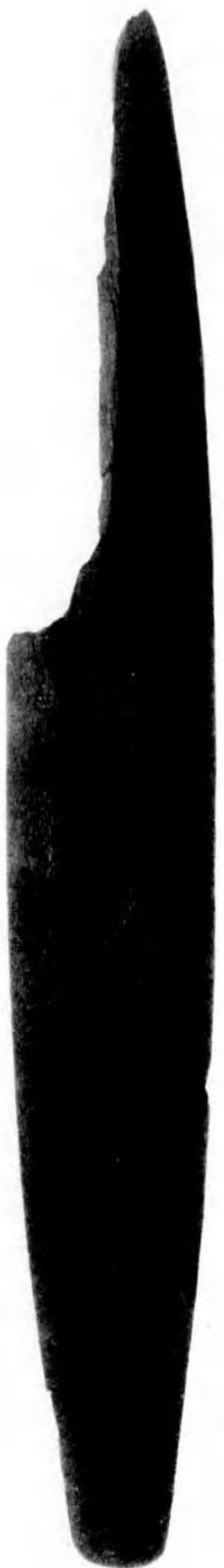
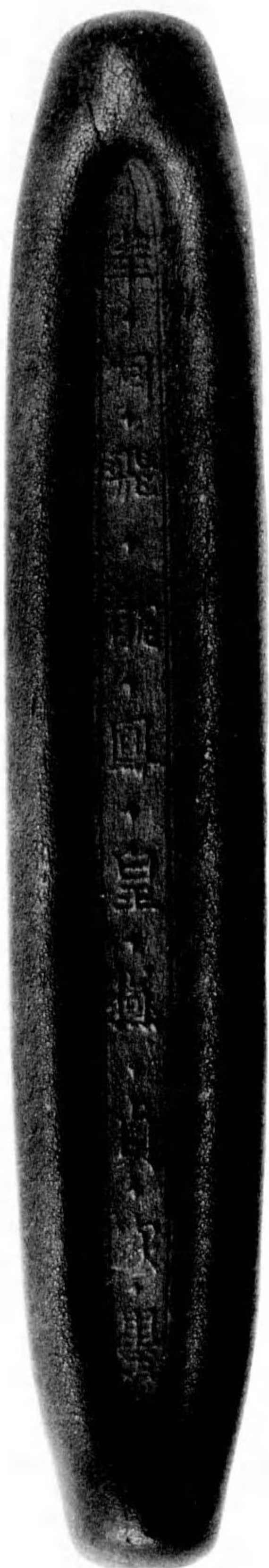
(原寸)

白墨一挺及殘闕

右長二四種二 幅三種二 厚一種六  
長二九種六 幅五種 厚一種九  
長二六種九 徑〇種九  
左長二種九 徑一種一

一挺の表に陽刻文「華烟飛龍鳳皇徽貞家墨」各文字の間に小點を印し、○のところは朱點があり、その背に朱書して「開元四年丙辰秋作貞□□□□」とある。





口口口

一、多...  
二、...  
三、...

其六

其七

其八

其九

其十

白銀一錢

第四十五回 第十四卷之四 其三



第四十六圖 假斑竹箱

命 寸

縱横二六種 盒蓋三種二

黒柿製印籠蓋造りで、表面に斑

竹皮を展へ貼し、黒柿の緒、黒

柿の床脚をつけてある。盒は原

品、蓋は新造品。前三圖蓋の 5

七挺の容器に充てゝある。



